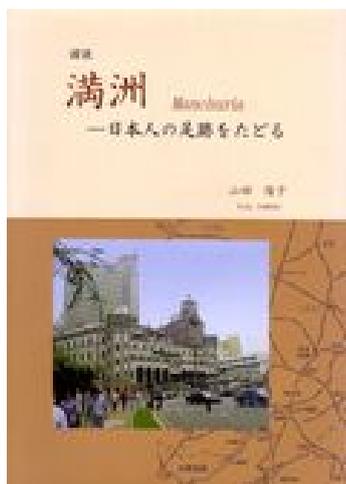


論文ではありませんが、中国帰国者の皆さまに関係が深い図説だ  
と思いましたので、一部分を紹介させていただきます。



梅田出版 (TEL06-4796-8611)

2011年7月12日発売

(編集・制作 朝日カルチャーセンター)

A4版 102頁 (ISBN 978-4-901242-94-3)

(この書籍は、一般読者向けに編集・刊行したものです。できるだけ多くの写真を掲載し、説明文は平易に短くまとめるようにしました)

## 図説 『満洲—日本人の足跡をたどる』

山田陽子 著

### 目 次

はじめに……………○

#### 第1章 奉天と瀋陽の狭間で—満鉄附属地と城内の日本家屋……○

今も残る日本人旧宅

日本人社宅の現在

奉天の代表的なホテル

総督府

中山広場の建造物

そのほかの銀行

市公署  
残存する満洲企業の社屋  
駅舎と事務所  
郵政局  
百貨店  
電話交換局  
給水塔と公園  
満洲医科大学  
鉄路局図書館  
満洲中央銀行  
学校  
鉄道総局・特派員事務所・領事館  
映画館  
奉天城内  
満洲事変勃発の地にできた博物館

**第2章 長春・撫順・丹東にて**……………○

長春（新京）  
撫順  
国境の街 丹東（安東）

**第3章 開拓団の逃避行と引き揚げ**……………○

黒龍江省に今も残る開拓団部落  
哈爾濱  
方正  
牡丹江・老爺嶺・松花江

**第4章 引き揚げの地「葫芦島」**……………○

おわりに……………○  
参考文献……………○

---

**[主な内容]**

第1章では、変わりゆく瀋陽の真ただ中で、今も残存している

日本人旧居や銀行、ホテル、企業ビルなどの建造物を通し、主として戦前の日本人の足跡をたどります。

第2章では、瀋陽周辺の撫順・長春・丹東にある建造物を通して、日本人ゆかりの地の現状を簡単に紹介します。

第3章では、満洲開拓団の人たちが、満洲奥地から引揚船の出る葫芦島にたどりつくまでの逃避行経路に沿って、敗戦後の苦難の道のりを紹介します。

第4章は、引き揚げの地「葫芦島」の現状を紹介すると共に、1946年5月から開始された引き揚げを帰還側、送還側双方の視点から取り上げます。

---

## 第3章 開拓団の逃避行と引き揚げより本文の一部抜粋

1945年、敗戦直前の8月9日午前零時にソ連軍が突如、満洲に侵攻してきました。日ソ中立条約の破棄を宣言し、「日本がポツダム宣言を拒否したため連合国の参戦要請を受けた」として宣戦を布告してきたのです。日本側では満17歳から45歳までの青壮年男子が根こそぎ動員されており、開拓団の村には婦人や子ども、お年寄りが残っている状態でした。

彼らは着の身着のまま、必死で逃げました。奥地の開拓団はソ連国境沿いの地から大河を渡り、山を越える逃避行の中で、襲撃や自決による多数の犠牲者を出しました。

たとえば、大八浪ターバラン（現在の中国黒龍江省樺南県大八浪郷）から逃避行した長野県泰阜やすおか開拓団の人たちは、厳寒や飢餓、襲撃などにより、おびただしい数の犠牲者を出しました。また、逃避行中に親と離れ離れになり、泣いているところを中国人に拾われ、そのまま中国人家庭に入って何十年も日本に帰るすべがなかった人たちも多数いました。生き延びるために中国人妻となり長い間、日本に帰国できなくなった婦人も多数存在しています。彼らは「中国残留日本人」と

呼ばれました。

牡丹江、<sup>ロウヤレイサン</sup>老爺嶺山、<sup>ホウマサ</sup>方正、<sup>ヘルビン</sup>哈爾濱、新京（長春）、奉天（瀋陽）などを経て、かろうじて逃げのびた人たちは、死の恐怖と闘いながら、やっとの思いで葫芦島にたどり着き、内地に帰還しました。

葫芦島からの引き揚げが開始されたのは、1946年5月のことでした。

葫芦島からの引き揚げは、1949年10月の中共地区大連からの引揚船を最後に前期集団引き揚げは終了しました。1953年3月に第一次後期集団引き揚げが開始されるまでの4年間は引揚船が出ませんでした。

後期集団引き揚げが終了する1958年、最終引揚船が日本に向かい出帆すると、個別引き揚げ以外には日本への帰国手段が途絶え、多数の日本人が中国に残留を余儀なくされました。

## 黒龍江省に今も残る開拓団部落



（筆者撮影）

開拓団の家はわらのようなものを刻み、土と混ぜ合わせて作った壁でできており、床にはオンドルがありました。

「土の床にアンペラという竹で編んだ敷物を広げて座ると、このアンペラを通してオンドルの暖かさが伝わりほかほかと心地良かった」と開拓団の人は語っています。

## 第4章 引き揚げの地「葫芦島」より 本文の一部抜粋

終戦の翌年、引揚命令が出され引揚船の出る葫芦島港には日本人が続々と終結しました。当時、港の岸壁には大勢の日本人が今か今かと乗船の順番を待ちながら生活していました。乗船の順番を待つ間にも栄養失調や病気で倒れ、亡くなる人も少なくありませんでした。路上で煮炊きし、雨で濡れた衣類を乾かしながら乗船日を待つて生活する人が多数いました。

1946年5月7日から1948年9月20日までに、葫芦島から105万1047人の中国居留日本人が帰還したと伝えられています。『葫芦島百万日本居留民の大送還』（中国遼寧省葫芦島市政府新聞弁公室・社会科学院編）によると、1946年5月7日から12月31日までに101万7549人、1947年6月25日から10月25日までに2万9627人、1948年6月4日から9月20日までに3781人という日本人が葫芦島から送還されました。日本人送還を記念して、葫芦島市内には『1050000日本僑俘遣返之地』と書かれた碑が2003年に建立されました。

送還者（1946年5月7日～1948年9月20日）	
1946（昭和21）年	1,017,549
1947（昭和22）年	29,627
1948（昭和23）年	3,781
合計	1,050,957（人）

終戦時、海外には軍人と一般民間人を合わせて660万人の日本人がいたとされています。そのうち約155万人が満洲に居留していました。このうちの105万人が葫芦島から帰還しました。

日本では、第二次大戦敗戦による海外在住日本人の帰国を「引き揚げ」といい、集団引き揚げを指しています。中国では「送還」あるいは「遣返」、「遣送」という表現になります。

日本人居留民全体のうち、満洲開拓団関係者に限れば、その引き揚げは1946（昭和21）年5月の開始から11月までに一応の帰還が完了し、その数は約11万人（58700世帯）です（満洲開拓史刊行会 1966: 827-8）。

終戦時に開拓民は16万7千人余、義勇隊は5万8千人余で合計

22万5千人余でした。死亡者と行方不明者の合計は8万2千人、ソ連抑留者は3万4千人といわれます（前掲書：829）。したがって満洲移民の内地帰還者は、終戦時に生存していた人のおよそ半分です。

当時、大東亜省は日本国内の食糧・住宅不足等様々な理由から居留民を現地に留まらせる方針でした。これが引き揚げの遅延した原因の1つです。また奉天をはじめとした満洲の南方や大連の海岸線などは、八路軍（中国共産軍）やソ連軍が厳戒態勢をとり、封鎖された状態でした。1945（昭和20）年10月からの朝鮮・台湾・中国本土からの引き揚げが優先され、その後やっと葫蘆島から日本内地への引き揚げが開始されることになったのは、敗戦から1年経過してからのことでした。この1年間に飢餓や病気で多くの人々が亡くなりました。

1946年5月7日、葫蘆島から第1組の日本人2489人が2隻の船に分乗して故国日本に向けて出帆しました。引揚船としてLST（戦車揚陸艦）、大型上陸用船艇、リバティー型輸送船、病院船などが使用されました。アメリカ軍の上陸用船艇は、船尾が巨大な扉になっており、戸がガラガラと下降する仕組みになっています。階段が四角に設けられ、それぞれ甲板に出られるようになっていました。

#### 中国東北地方の遣送計画

（葫蘆島市対外文化交流協会・人民政府新聞弁公室編 2006：90を基に筆者作成）

期別	地区	日本人の数
第一期	錦州、海城、瀋陽など	398,000
第二期	長春、吉林、延吉など	408,000
第三期	哈爾濱、阿城、安東など	227,500
第四期	北安、松花江、通化、大連など	405,500
第五期	瓦房店	10,000



葫芦島の海（筆者撮影）

1945年8月9日のソ連軍侵攻から避難生活は、はや1年が経とうとしていました。乗船前に収容された錦州収容所では検疫が特に厳しくなっていました。保菌者が出れば、その集団は何日も残されました。錦州収容所は、日本の軍営の厩でした。この収容所ではコレラが蔓延<sup>まんえん</sup>し多くの死者が出ました。

いよいよ葫芦島に向かう日、乗った列車は、木材を運ぶための側面のない台車であったため、人々は振り落とされそうになり、必死でしがみついていた。

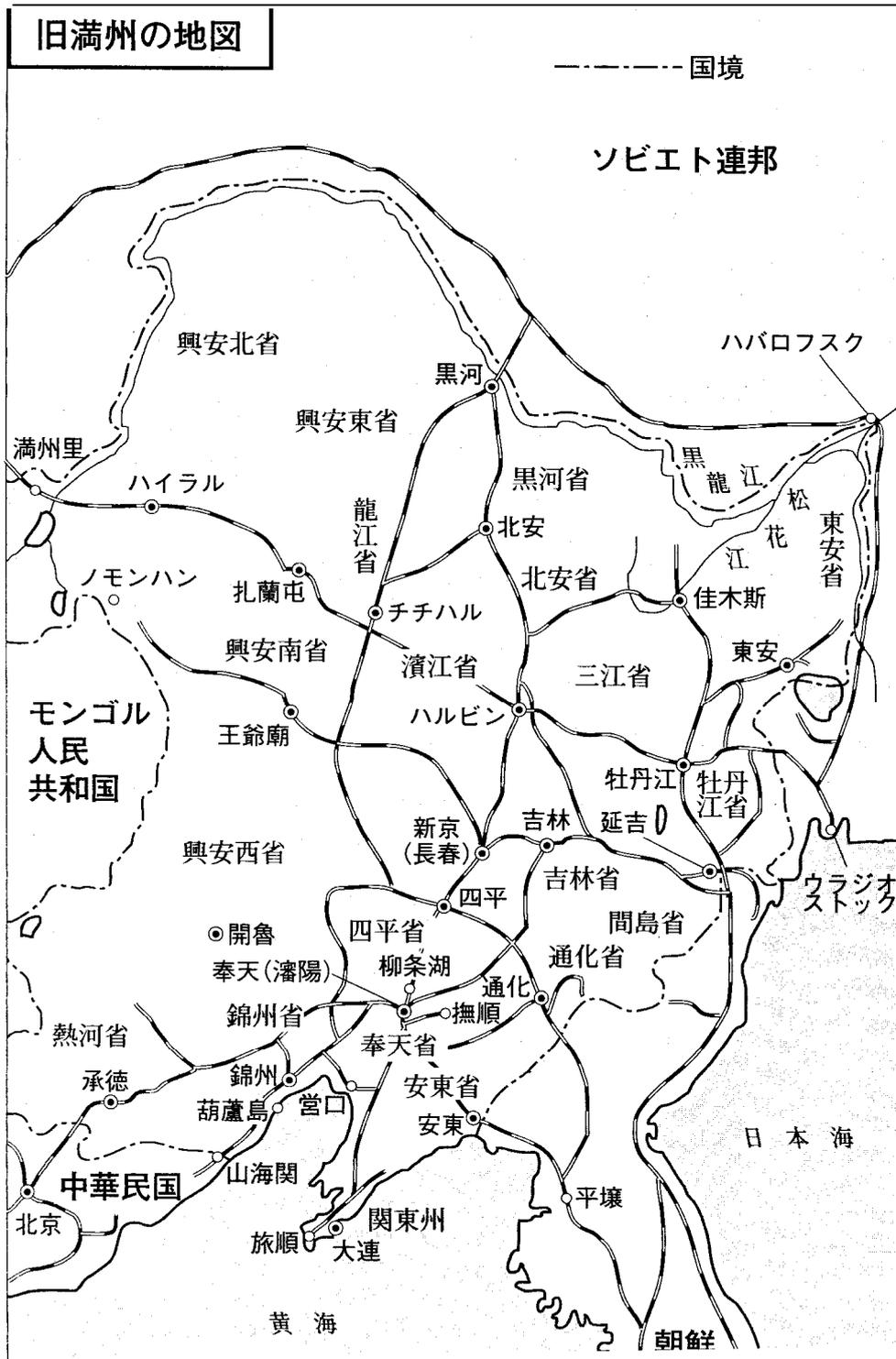
乗船にあたり、厳しい検閲が行なわれました。身に付けていた記念章や写真はすべて没収され、思い出の品々もすべて取り上げられました。

引揚者は乗船前に、頭から爪先に至るまで全身に有機塩素系の殺虫剤 DDT をかけられました。やっと乗船した引揚船中でも多くの死者が出ました。船中で親に死なれ、孤児になった子どもたちや、子どもに死なれ、悲嘆にくれる親たちの姿がありました。

遺体はすぐに水葬に付されました。祖国日本まであと一步のところまで亡くなった人は少なくありません。多難の末に生き延びた人たちは、佐世保港、博多港、舞鶴港にそれぞれ入港しました。

（以上、一部抜粋）

(資料)



(地図の出典：重田敬弘 (2003)『母と子でみる「満州」再訪・再考』草の根出版会)

□参考文献（著・編者名アルファベット順）

- 蘭信三編（2009）『中国残留日本人という経験—「満州」と日本を問い続けて』  
勉誠出版
- 飯田市歴史研究所編（2007）『満洲移民—飯田下伊那からのメッセージ』現代  
史料出版
- 金内義亨（1998）「終戦前後の追想」平和祈念事業特別基金『平和の礎—海外  
引揚者が語り継ぐ労苦Ⅷ』同基金
- 葫芦島市対外文化交流協会・市人民政府新聞弁公室編（2006）『SHIJIANWEILAI』  
葫芦島市
- 坂部秘一（1998）『幼き日の思い出』愛知県引揚者更生団体連合会編『死線を  
彷徨いて—海外引揚者が語り継ぐ労苦』同会
- 重田徹弘（2003）『母と子でみる「満州」再訪・再考』草の根出版会
- 瀋陽市人民政府市志弁公室編（1998）『瀋陽市志』瀋陽出版社
- 瀋陽市人民政府地方志編纂弁公室編（1985）『瀋陽市情』遼寧人民出版社
- 「千代田・最後の生徒たち」編集委員会編（2005）『千代田・最後の生徒たち  
「奉天 1945 年」—残像を紡ぐ—』
- 武田二百年史編纂委員会編（1983）『武田二百年史』本編・資料編、武田薬品  
工業株式会社
- 中国近代建築史研究会・日本アジア近代建築史研究会編（1995）『中国近代建  
築総覧・瀋陽編』中国建築工業出版社
- 趙玉民編（2002）『瀋陽史跡図説』遼寧美術出版社
- 趙玉民編（2006）『瀋陽史跡図説増補版』遼寧美術出版社
- 中繁彦（2004）『沈まぬ夕陽』信濃毎日新聞社
- 中島多鶴・NHK取材班編（1990）『NHK スペシャル 忘れられた女たち—中国  
残留婦人の昭和』日本放送出版協会
- 西澤泰彦（2000）『図説満鉄「満洲」の巨人』河出書房新社
- 浜野健三郎編著（1972）『あゝ満洲』秋元書房
- 福田實（1976）『満洲奉天日本人史』謙光社
- 満洲開拓史刊行会編（1966）『満洲開拓史』同会
- 満洲教育専門学校附属小学校、奉天千代田小学校同窓会『会報ちよだ』vol. 12  
「満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶」編集委員会編（2007）『満洲泰阜分村  
—七〇年の歴史と記憶』不二出版
- 武藤正道（2000）『アジアの曙—死線を越えて』自由社
- 山田陽子（2009）「日中関係から見た引揚地の戦後 60 余年—日本人引揚事象  
をめぐる『葫芦島』の変化を中心に—」四日市大学論集第 22 巻第 1 号

山田陽子 (2010)『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』風媒社

楊学義主編 (2005)『図説瀋陽』吉林文史出版社

羅玲玲 (2008)「居住行為様式の変化と住宅環境の変化で生じる衝突—瀋陽における近代日本式住宅の研究—」王秋菊編『中日比較研究論集』東北大学出版社

(上記、参考文献名および著者名の中に、本来なら簡体字で書くべきところ、やむを得ず日本の漢字を代用した箇所があります。)

---

## 図説 『満洲—日本人の足跡をたどる』

著者：山田陽子

元、中国遼寧省瀋陽市「東北大学」外国語学院日語系教員  
現在、修文大学短期大学部非常勤講師